

[昭和41年度]九州大学農学部附属演習林研究経過報告表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1456247>

出版情報：演習林研究経過報告．昭和41年度，1967-07-10．九州大学農学部附属演習林
バージョン：
権利関係：

は　じ　め　に

林学の試験研究、ことにその中心部分を占める森林の育成過程に関する試験研究が、すこぶる長期にわたらねば、その成果を十分に見究めえないことは、一応誰しも認めるところである。林業生産の一サイクルの超長期性という、産業としての弱点が、研究の面でもそのまま不可避のこととして受け入れられているからであろう。

しかし従来の林学研究はその「長期性」を、あまりにも絶対不可侵であるかの如く考えてきた傾向はなかつたらうか。いやそれよりも、その長期性に甘え過ぎ、あるいはそれを都合よく利用していた、といつては穩当を欠くであろうか。

育林や施業の試験研究においては、研究者一代では結果の出ないのがあたり前だ、というような考え方があり、そのため研究が途中からウヤムヤになつていき、責任の所在もボヤケてしまうことが多い。それをばイキの長い、先細りにならない、云うなれば優良丸太のように「本末同大」の試験研究として終りを全うさせることは、大学演習林のような研究機関でこそ、まず努力せねばならぬ目標である。

同時に大事なことは、その長期性を与件として受けとるのでなく、それをのり越えていくことを狙いとする研究の方法であり、実行である。農業で実現しつつある環境の制御や生産期間の短縮を、同じ方向で林業にももつと広くとり入れることはもちろん、林木に適合した独自の研究領域として切り開いていくことが、望まれるのである。粕屋演習林に新設を進めつつある林木育種研究施設なども、その要望に応えるものでありたいと思う。

林業の試験研究では、新奇をききそうことは百害あつて一利もないであろう。しかしアイデアの新鮮さは是非必要である。それに狙いの適格さ、計画の周到さと実行面での不屈さが欲しいものである。演習林の研究がそのような配慮で企画され進められていくことを期したいものである。

大学演習林に特別会計制度が採り入れられてから、九大演習林としても、収入予算の急上昇にともない事業規模は拡大した。そのため、さなきだに手薄な研究陣もその方に勢力を割かねばならぬことが少なくなかつた。もちろん演習林経営において事業と研究とは、全く別個のものであつてはならないのであるが、今の体制では、過渡期の無理が歪みにならぬようにとの配慮がどうしても必要になつてくる。

さてそのような中で、九大演習林の研究は41年度も、上記の期待に副うべくたゆみなく続けられてきた。ここにこのような形で研究経過の報告ができることを、皆さんと共に喜びたいと思う。

昭和42年5月

演習林長　　塩　谷　勉